

## 政治家が聖書を読むとき

対談者 高松教区司教・田中 英吉

青年時代、キリスト教の運動にかかわった人間の一人として、あくまで誠実に信仰に相對する心境の吐露。大平・宏池会会長時代の対談。田中英吉氏は昭和五八年に死去。

### 聖書の人間関係に興味

田中 もう十年ほど前になりますか、ローマで当時の教皇・ヨハネス二十三世にお会いになられたのは。

大平 ええ、そのころです。

田中 私、その様子をテレビで拝見しまして、とても好感もったのを覚えています。

大平 そりゃあ、どうも（と苦笑しながら田中司教に会釈）。

田中 いや、お礼をいわなきゃいけないのは私どもの方で、実際、政治家の中にこれで味方が一人ふえたと思えましたもの（笑い）。

残念なことに、これまでバチカンに好意的な政治家は日本に少なかったと思います。その意味で、大平さんのような協力者を得たことは、こころ強い限りです。ことに、日本の精神界は混乱して居るでしょう。ですから、大平さんこそキリスト教を通じて国民に精神的な示唆を与える人物だと、こころある人は期待していると思いますね。

大平 そうまでおっしゃられると、こりや大変な重荷ですわ(とテレる)。

田中 そのヨハネス二十三世がお書きになった『地上の平和』という本があります。(紙袋から取り出して)これですがね。中を読みますと、「宝のあるところにこころがある」と書いてある。つまり、経済に宝の基準をおけば日本人のようにエコノミック・アニマル呼ばわりされても仕方のないこころの持ち主ということになる、というわけですよ。で、結論として人間に大切なものは、お互いの人間関係、人格を重んじ尊敬し合うこころ。

大平 (深くうなずきながら聞いている)

田中 その件に関連していいいますと、南米なんかを回ると、とくによくわかるんです。日本へ帰ってくると、たいていの人は「むこうは遅れているでしょう」というんです。なるほど、南米には日本のような経済成長もないし、立派な新幹線や文化施設はどこにもない。ですがね、南米の人たちが伝統的にもっている暢気さというか人柄のよさ、そういうものを逆に日本人が忘れてるんじゃないかと思うんですがねえ。

大平 そんな面があるかもしれませんが。

田中 (話題をサラリと変えて) 聞くところによりますと、大平さんは聖書の研究に大変こ熱心だとか。

大平（笑つて）そういわれるほどのことじゃないんで、ね。私は若いとき聖書の勉強をさせていただいた。聖書の立派な味、ほんとうのこのころを汲みとることがまだ出来ないでいるんです。（少し間を置いて）つまり、こういう感じですねえ。あのキリストを中心にした人間関係……多くは弟子、政治家、王様、王女、それに漁夫や百姓もおれば、盜賊や遊女もいる……そういう絢爛たる人間の横のつながりから、私は非常に教えられるんです。

それで私、現代もそのままだと思つんですね。とくに、あの弟子たちがそれぞれの立場でキリストに対してとつた姿勢に興味があるんです。

田中 やはり、われわれと聖書の見方が違う。政治家的な発想ですな（笑い）。

### 歴史二千年、短いです

大平 キリストの周辺に多くの人が集まつたとき、彼らはキリストを中心にした神の国で自分たちがどういふ役割りをもつかを考へてるんですね。ところが、キリストが孤独な立場になり、世間から棄てられて最後に十字架にかけられる過程では、キリストを裏切つたりして去つていく人が出てくる。無知といへば無知ですが、この世界が神の国に変わるんだと俗っぽい夢を抱いていた人が失望したわけですね。

（しばし絶句のあと確信に満ちた表情で）だけど、あのキリストの中に神を見てた人はおつたんです。神の国はそんな甘いもんじゃなく、キリストの形相の中に、キリストの死のもとにあるんだと見てた人は、みなまつとうな道を歩いてるでしょう。一大小説ですね、聖書というのは。しかも、飾ら

ない事実だけが書いてある。いいことも悪いことも、真実も嘘も、虚栄も実行も、ね。そういうこと、現代も変わりませんね。だから聖書を読むたびに、人間っていつも同じなんだなあ、と思つてね（笑い）。

田中 ええ、同じことです、いつの世も。

大平 そういえば、宇宙の起源からいうと、二千年という歴史、ある意味で短い歴史ですな。

田中 （大平氏の氣宇広大な発言に去勢された格好で含み笑い）

大平 短い歴史だから、人間がそんなに進歩するはずがないですよ。

田中 そりゃそうです。われわれ進歩したかと思うと死ななきゃならん（笑い）。繰り返しですね。（感心の面持ちで）しかし、そういうふうには聖書を「観」になることには頭が下がります。私どもにはオースドックスな学問として、きれいなことで済まそうといるところがある。小説家の稲垣足穂という人がある雑誌で「いとわしい死刑台である十字架をもって、人類救済のしるしに変えたのは、ただ一人キリストがいるだけ」といつていますが、飾らないありのままの姿を聖書から読みとる知恵というか勇氣、それを忘れちゃいけませんね。

大平 キリストの言行をまねる、キリストの模倣……そういう野望を私はもてませんね。人間がつまらんから（笑い）。けども、神を中心に集まっている人間の中で、どの人の生き方が正しかったか、間違つていたか……（思い出すように）遊女（マグダラ）のマリアですか。あの人は貧しい人ですね。ああいう人のまねだったら、できるんじゃないかと思えます。

田中 親しみがもてるんですな。

大平 ええ。キリストは高すぎて、とつても近づけませんけど、ね。

田中 聖書の中で、どれがお好きですか？

大平 旧約だったらエレミヤが好きですね。エレミヤという人が伝えたあのペーソス……なんとも  
いえない味があります。

田中 (笑い顔で) こいつはかなわんわ。

大平 新約はどなたも個人的にとらえていますな……マタイにはマタイの味があるし、ヨハネには  
ヨハネのよさがある。中で格調が高くて一番アピールするのはローマ書じゃないでしょうか。

田中 私どもが聖書のすばらしさを百回説教するより、あなたの鶴の一声の方が日本人に説得力が  
ありますよ(笑い)。

大平 あのエレミヤは……なんですね……彼が考えている国家に対する愛情、忠誠心……それが現  
代人の参考になるもの、多いです。

田中 (手に負えない、とでもいいかげんな表情で) ますます、かなわん。結局、私らあまりにもき  
れいに料理しすぎたキリスト教を学んで説教したり、聖書の研究会をしますけど、自分の体験や意  
識を織りこまなかつたら、力が弱いということですね。つくづくそう感じます。

(真剣な顔で) それで、聖書の力が大平さんの政治の上に活かされれば『鬼に金棒』でしょう。話  
は最初に逆戻りしますが、現代の日本人は働くことを最高の美德のように考えている。なんのために  
この世に来たとか、人生の目的は何かとか、あまり考えませぬね。大平さんも明治年まれだと思いま  
すが、是非はともかくとして、昔は教育勅語のような精神的基盤があった。現代は時代も違いますし  
世界的な視野も必要ですが、ただこれからの日本に教育勅語に代わる精神的な柱が、もっと具体的に  
欲しいなあ、と思います。

丘の頂上に幸せなし

大平 私はね、いまの日本の時点に立つて考えると、いままでの日本は全体として欠乏の日本だったと思うんです。つまり、人間は多いのに、国のかたちを作って西洋諸国に早く追いつかなきゃならんし、外敵も防がなきゃならん。そういうことをやっていくには、あらゆるものが足りない。資源も知識も足りないし、技術や組織も不足している。全体の欠乏ですね。欠乏の状態だったから、いま司教様がおっしゃったように、みんな働いて充足を求めたんですね。そういうするうちに、富める人と貧しい人の経済的な不平等が生まれてきた。

田中 社会主義思想が起こつてきたゆえんですね。

大平 はい。それは悪いことじゃないんです。けれども、その根本で物に対する獲得欲というかが、物質に対する過剰な期待が支配したと思うんです。ところが、戦後日本の生産力が伸び、技術が活用され、組織が整備されて、日本の経済が非常な躍進を遂げましてね。その結果、食べ物が充足されてきた。その次に着る物もどうにか間に合うようになってきた。いま不足気味なのは住宅ですな。住宅を標準化しようと、いまやっているわけです。けれども、われわれが欧米諸国に追いつこうと息せききつて丘の頂上の上つてみたら、どっこい、その周辺に幸せはなかったというわけですね。豊かになればなるほど、不安な材料がふえて、世の中が落ち着かない。

田中 なるほど。ようわかります。

大平 だからといって、日本が歩んできた道はムダだったとは思いません。だが結果として、進路

を見失うことになった。最近になってようやく、人間の魂は富や物質的な豊かさだけでは満足しない、ということがわかりかけてきたと思うんです。

田中 そうですね。確かです（と三度相槌）。

大平 従って、もう物質的な成長を追い求めるのは利口なやり方じゃない、GNP万能主義はもう止めにしてよじゃないか、われわれは静かな環境と清い水、それにうまい空気と豊かな緑が欲しい、というような、ね。これは、ええ風潮だと思っんです。

田中 教育者に聞いても、何か物足りなさを感じ、もがき求めているのがいまの日本人だ、ということですねえ。

大平 その通りですよ。資本主義や共産主義について議論する時代は終わったんです。そういう哲学から解放されて、新しい哲学とは何か、新しい生き甲斐や価値とは何か、を深く考える時代に入ったんです。

田中 長い苦勞の結果、日本人がようやく目覚めたんですな。それじゃ、これからは日本もよくなる……。

大平 （田中司教の語尾をはしょって）日本をよくする　なんて簡単にいいますが、人間社会は聖人の集団じゃないですからね。ま、いろんな人間があつて、勝手に気ままな劇をやっているから、一口でよくしようとはいえませんが。また、決してよくはならない。だからといって、神さまがわれわれに対して無慈悲で愛情が足りないかという、僕はそうじゃないと思っんです。愛情があたりだから、物事を手軽くできないように配慮されている、と思っますよ。

田中 実によくわかります。

聖書は真理ですなあ

大平 人生には、いろんな困難がありますね。その困難の道行の中に、神や天国との接点があると思っんです。あの弟子たちは神の国でキリストの一番近くに座することはかり考えていた。そうなれば、憎しみも嫉妬もない神の国が完成するんだ、とね。ところが、その考えは甘かったわけですね。そこでいまの世の中を、闘争のない理解と信頼と愛情にあふれた国にするにはどうしたらいいかを考えてみますと、とても一筋縄じゃいかんですな、この問題は。

日本は立派なものにはなりません。なったら大変ですよ（笑い）。そこで私たちは何をなすべきであるか、ですがね。地域社会とか職場とか小さな家庭とか、交友の人間関係の中で、回りの人を利用して財産を持つとか権力の座につこうという営みじゃなくて、友だちを慰めたり、わずかな持ち合わせのものを分け合って食べるとかの営みを懸命にやっていくその姿、その中に神の国があるんじゃないですか。

田中 はあ、大平さんの意図がよくわかります。

大平 だから、綱引きのようなものだと思っんです。このままだと闘争や対立ばかりが強くなって、人間的な信頼や理解の価値が失なわれてしまっ。とめどもなく国内が乱れてしまっんです。だから、なんとかして失われた人間性を引き戻さなきゃならない……聖書に「汝らは地の塩たれ」とあります。……私は少なくとも地の塩的な役割りを果たしたいと思っんです。だから僕はキリスト教の哲学は「永遠のいま」だと思っますよ。



田中 そう。いまが永遠、ですね。

大平 神の国が山のかなたにあるんじゃないなくて、いま、ここにあるわけだから、きょう一日精いっぱいやってみようという精神的なゆとりが大切です。だって、いまや日本とかアジアとか世界を考えて、いったい何がありますか。

田中 きょうが神の国につながっているとすると、一刻もおろそかにできません。(真顔で)それにしても、大政治家の考えておられることはすばらしい。司教が集まったとき、一つ説教を頼もつかしらん。

大平 (大いにテレテ)とんでもない。聖書は偉大な文学だということですよ。文学というより真理です。

田中 講演のとき、聖書のことばを必ず入れられるそうですね。

大平 (一段とテレテ)いやいや、そんなことはないんですけど、ね。ただ若いころキリスト教と仏教の勉強したのを、ときどき思い出して楽しんでるだけなんです。

田中 大平さんは、自分に厳しいですか？

大平 そうありたいと思ってますが、難かしいですなあ。

田中 (笑って)私なんか、ときどき人に厳しくなってますね。ところで、私は大平さんと同郷なんです、高松の街は変わりましたね。

大平 そうですね。昔の姿をとどめているのは西通町くらい、ですか。

田中 ええ。でも日本人が忘れた風俗や人情が四国には残ってますね。防衛庁長官になった増原恵吉は私の同級生なんです。宇和島中学の……。

大平 ああ、そうですね。ありやりや……。

田中 彼は偉くなりました。昨年、仙台の航空機事故で責任をとって辞めましたが、いい男です。それにしても、きょうは大平さんの内面の豊かさを知って意を強くしました。知らない人が多いんじゃないですか、お顔を見て、親しみ持てるぐらいに思っただけでね。それだけでは……（笑い）。

大平（満面に笑みを浮かべて）いや、それでいいんですよ。香川県の企業にも学校にも、すぐれた人があると思うんですよ。それこそ、総理大臣にもってきても立派につとまる人が浜の真砂ほどおると思うんです。それなのに歴史のいたずらとでもいうんですか……私なんか香川県を代表する人物だ、なんてね。中身はお粗末なんです（ハツハツハツと爽快な笑い）。

田中 そういってお気持ちがありますね。いや本当です。たいていの政治家はそれができない。お互いの立場で、『地の塩』になるようがんばりましょう。これからの活躍をお祈りします。